

ソフィア・アラベラ・アルウインの幼児教育思想について (1)
～日系二世女性が幼稚園創設に至った教育思想の一考察～

嶋田 貞子

About Preschool education thought of Sophia Arabella Irwin (1)
～ A second generation Japanese American lady considers
one of an educational thought to kindergarten foundation ～

Sadako Shimada

はじめに

昨年、2016年10月に杉並区にある私立「玉成幼稚園」が創立100年を迎えた。玉成幼稚園に教諭として勤務していた関係で100周年の記念行事に参加する機会があり、改めて100年という時間や年数の重みに感慨を覚えた。

日本における幼児教育は、明治9(1876)年に創設された国立の「東京女子師範学校附属幼稚園(現 お茶の水女子大学附属幼稚園)」に始まる。その後、明治12年に大阪府立模範幼稚園、鹿児島女子師範学校附属幼稚園、仙台に木町通小学校附属幼稚園などが発足した。明治13年には地元有識者の要請で愛珠幼稚園(大阪府 町立)と開設されていった。東京女子師範学校附属幼稚園を始めとした国公立の幼稚園創設に至る資料や保育内容・方法、教職員数、設備等などは、我が国初の幼稚園創立、あるいは公立設立と言う点から多数の資料が残り、研究がなされている。しかし、玉成幼稚園はソフィア・アラベラ・アルウイン(Sophia.Arabella.Irwin)という日系二世の女性が個人で設立したため、資料も少なく、研究がほとんどなされていない。『幼稚園教育百年史』によると、キリスト教関係の保姆養成機関として「8 玉成保姆養成所 大正五年、東京の麴町にアルウインによって創設された。アルウインはキリスト教団からの補助に頼ることなく、個人立の小規模にして家庭的な保姆養成所をつくり、全人教育を施した。修業年限は一か年で、生徒数は七人ないし十五人程度であった。同養成所は関東大震災により校舎を焼失し、一時小石川の借り住まいしたが、昭和二年、東京下高井戸町に新校舎を建て移転した。』¹⁾とある。幼稚園創設期(明治期)の40数年後の設立ではあるが、個人立で幼稚園と保育者養成校を開設するに至った経緯について興味を覚えた。先行研究や資料を探してみたが、研究や資料を見つけるのは至難の業であった。そこで、この幼稚園創立100周年を機に、日系二世のソフィア・アラベラ・アルウイン(以降、ベラと呼称する)が何故幼稚園と保育者養成校を創設するに至ったのか、本論文では、創設のきっかけや設立の経緯に至ったソフィア・アラベラ・アルウインの教育思想について概観し考察したいと考え、本テーマを設定した。

1. 生い立ちと成育環境

明治16(1883)年11月24日、東京芝区のハワイ(漢字では布哇と表記、今後ハワイとカタカナ表記する)公使館内で、父ロバート・ウォーカー・アルウイン(ハワイ公使)、母いきの第一子(長女)として、ソフィア・アラベラ・アルウインは誕生した。第一子であったため、両親の愛情を一身に受け、豊かで恵まれた生活環境の中で、丈夫にすくすくと育った。(図1, 図2)

ベラが5歳になると、日本キリスト一致教会の戸田忠厚牧師より幼児洗礼を受け、築地語学校(現 雙葉学園小学校)に入学した。ベラの家庭では、父はアメリカ人で英語を話し日本語はほとんど話せず、母いきと公使館の多数は日本人で、家庭生活を始め、礼儀、

作法、習慣、伝統行事はすべて日本流で、日本語の会話が主流であった。築地語学校でベラは英語の基礎訓練を受けたので、自宅に帰ると父ロバートと英語で話した。父は英語で話せる相手がいなかったため、ベラとの会話を大変喜んだ。また、ベラも父と話すことで英語の復習になり上達した。父は、本国から英語で書かれた話や詩、英字新聞を取り寄せて読み、郷里の唱歌をベラに教えて一緒に歌ったりした。その後、ベラをアメリカで正規な女子教育を受けさせるという、父の強い希望により、二人は渡米した。



図1 ベラの両親 宮中参内時



図2 幼児期のベラ

ベラの両親について、二人の出会いのいきさつを補足して記載する。父、ロバート・ウォーカー・アルウィンは、デンマークのコペンハーゲンで誕生した。彼は高校生の時に父親を亡くし、家族を養うために米の太平洋汽船会社 (Pacific Mail Steamship Company) に入社し、慶応2年 (1866) 年に日本駐在員 (22歳) として横浜に来た。その時に両替屋「スズモト」で、たまたま手伝って、お茶をだした武智いき (ベラの母) を見初めて、長い年月 (16年間) 努力して、政府や教会、親戚、勤務先の同意を得て手続して、いきと明治15 (1882) 年、38歳で結婚にこぎつけた、という苦勞が記されている²⁾。ベラの父ロバートは、ベンジャミン・フランクリンの後裔である³⁾。ちなみに、フランクリンはアメリカの政治家、外交官、著述家、物理学者、気象学者として著名で100ドル紙幣の肖像画として描かれている。雷鳴の日に、凧をあげ稲妻と電気の同一性を発見して避雷針を発明した。また、アメリカ合衆国独立宣言文の起草者として著名である。

明治4 (1871) 年、日本とハワイが和親通商条約を締結した。その際、ハワイ国は、在日外国人の中から日本通で政財界に友人の多いロバート (当時27歳) をハワイ総領事に任命した。明治18 (1885) 年、シティオブトウキョウ号で第1回の移民 (完約移民) の943名を送り出した。以後、明治27 (1894) 年の移民終了まで、実に29,339名が渡航し、

ベラの父ロバートは「ハワイ移民の父」と呼ばれ、その名を永久に残しているのである。現在、別荘として使用した伊香保別邸は「旧ハワイ王国 駐日代理公使 ロバート・W・アルウィン別邸（群馬県伊香保町）」という町の文化財指定史跡として、伊香保町教育委員会が管理している。

2. 父の故郷、アメリカ留学と祖母の影響

明治29(1896)年、3月に築地語学校を卒業した後、13歳のベラは父に連れられて横浜港から太平洋汽船に乗船し渡米した。アメリカ、フィラデルフィア市ハミルトンに住む父の母、ベラの祖母宅に滞在し教育を受けることになった。

初めて会う祖母(ソフィア・アラベラ・ベイチ)を始め、叔父、叔母、従兄妹たちは温かく迎えてくれた。父と祖母は、ベラに最良の教育を受けさせるために、叔母達(父の姉妹たちは皆、女子教育に携わっていた)に相談した。ハミルトンストリートにあるマダム・サトン(ベラの従姉 愛称 アニー)の経営する「女子寄宿学校(日本の高等学校)」に9月より入学した。全寮制であったが、マダム・サトンの配慮により土日は祖母の家に帰ることが許された。ベラは当初、酷いホームシックになったが、「自分の祖国が日本とアメリカの両方にある」ということを明確に理解して、両親と自分自身のために勉学に励むことを決心したのである。(図3)

「女子寄宿学校」でのベラの成績は、入学当初はどの科目も中位であったが、1年生後期からは進歩して、学期末には優秀賞「金の星」を獲得している。2年生からは、どの科目もA以上となり、卒業までの5年間ずっと「金の星」をとるほど優秀な生徒であった。勉強の他にも、ベラはピアノや社交ダンス、舞踊、水泳、テニス、自転車乗りなどもマスターした。(図4)

しかし、一方では二世であることでいじめにもあっていた。

ある時、祖母たちと湖畔で週末を過ごしていた時、ベラが自転車に乗り森をサイクリングしていると、数人の男子に出会った。彼らは、ワッと喚声をあげながらベラを追いかけてきて「ヤーイ、黄色坊のチャイニーズ、おっころ、おっころ」と囃し立てた。ベラは怒って自転車ごと方向転換し、彼らの中に突っ込み自転車から落ち、服は泥だらけ、帽子はペッシャンコで擦り傷・切り傷だらけで壊れた自転車を押しながら帰宅した。出迎えた祖母の膝に取り付いて、ベラは「私はアメリカ人ですね、貴女の孫ですね」と泣いて訴え、食事も摂らずしばらく泣き続けた、という事があった。アメリカは自由独立の国であったが、現在でも問題になっている程、人種差別や偏見が根強くあり、白人優位の観念が浸透していた。有色人種(黒人や東洋人等の肌色が異なる民族)に対して、嫌忌感や蔑視を多数の人が抱いていた。祖母は取り乱したベラを優しくいたわり、傷の手当てをして、祈って聖書を読み、「神は人間を平等につくられた」と話し慰めたのである。このような事件は、寄宿学校でも度々起こった。例えば、ダンスの時に介添えを断られたり、誕生日にベラだ



図3 渡米して (父と一緒に)



図4 自転車に乗って

け招待されない、寄宿学校の部屋の同室を拒否する生徒もいた。また、ベラが成績優秀でクラス代表に推薦された時は、他の学生から抗議があったりした。しかし、校長のマダム・サトンの指導や祖母の愛情と信仰心の影響を受けて、ベラはたくましく成長していった。

マダム・サトンの学校では躰教育が厳しかった。躰教育の内容は、「①責任の完遂、②自己最善を尽くすこと、③清潔と整頓、④信仰第一の生活」である。ベラを始め寄宿学校の生徒たちは、躰教育をしっかりと実施され、その後、この躰教育の効用とベラの性格を理解する生徒も増え、人種差別やいじめはなくなり、ベラにとって、5年間の学校生活は楽しく充実したものとなった。(図5)

さらに、信仰心が篤い祖母にぴったり寄り添って暮らす中で、祖母からの愛情をたっぷり受け、祖母の篤い信仰心に感化されたのである。毎日の日課として、祖母と朝、夕、晩と聖書を共に読んだ。その上、祖母から「人間は授かった自分の生命に対して、神への返礼として何かをしなければならない」という先祖であるベンジャミン・フランクリンの信念を



図5 マダム・サトン寄宿学校の友人 (中央 ベラ)

繰り返し聞き、また、「私（祖母）は結婚して、他人の生んだ子どもと、自分の生んだ子どもを育てました。子どもたちが何よりも神様を知る者となるように努力しました。それが私の神様への精一杯のお返しであります」⁴⁾ と話した祖母の言葉が、ベラの心に深く刻み込まれたのである。

父の故郷であるフィラデルフィアのマダム・サトンの寄宿学校に5年間（初期3年間：普通課程、後期2年間：特別課程〈代数・整数・幾何学等〉）留学し、その中で辛い事件もあったが、祖母と共に生活する中で、祖母の信仰心、優しく柔和で不平不満を訴えず何事にも動じない平常心、公平な態度などの多大な影響を受け、ベラもキリスト教の信仰を始め大きな収穫を得たのである。祖母と共に過ごし、寄宿学校で過ごした5年間は大変楽しく充実した日々となった。後に、この祖母と共に生活した留学経験がベラに深い感銘と影響を与え、キリスト教への篤い信仰心を基盤にした使命感となり、さらに、幼稚園創設の原動力になったと考えられるのである。

3. 日本に帰国して

明治35（1902）年6月、ベラはマダム・サトン寄宿学校を主席で卒業した。ベラの卒業を祝うことと老母を見舞うために、父は渡米した。ベラの親しい友人たちは別れのパーティーを開いてくれ、また、祖母からは金の鈴のロケットを卒業祝いにもらった。その時の「神様を、一刻も見失ってはなりません」という言葉が、祖母の遺言となってしまった。留学する時は13歳の少女であったが、留学経験を通して、辛い体験も含め充実した学生生活を通して19歳の淑女に成長していたのである。

日本に帰国すると、アルウイン家は飯倉栄町のハワイ公使館（明治30年ハワイ国がアメリカと合併したので、これを機に父はハワイ公使を辞任した）を引き払い、三田綱町七番地に移転していた。ベラの母いきは、長女であるベラを心底頼りしていたので、帰国を大変喜んだ。そして、日本に帰国して最初にベラがしたことは、母をキリスト教に導くことだった。それと同時に、ベラは母の勧めもあり日本文化の習い事も多数学んだ。小笠原流の作法、茶の湯（表千家）、華道（遠州流）、箏曲（山田流）、書道、日本画、日本史、日本文学、日本美術史等も家庭教師から学んだ。これらの日本文化の学びの中で、ベラが特に好んだのは葛飾北斎の版画と万葉集を始めとした和歌、それと囲碁（セミプロ並み）であった。さらに、母の影響から百人一首も好んでしていた。万葉集や百人一首を好んだ点は、後日、保育者養成校を創設した時に、正月には生徒と「カルタ会」を盛んに催したという点からも、理解できるのである。

アメリカ留学中は、欧米の文化や学習、日本に帰国してからは日本の文化や伝統など、楽しみつつも非常に高度な技術を身につけた。その後、このような造詣の深さや豊かな経験が幼稚園や保育者養成校創立への礎や保育者養成の理念、さらには、保育内容・指導方法になったのではないかと推察できるのである。その他にも、ベラは母を助けて妹弟（ベ

ラは二男四女の長女)の面倒や世話をし、両親の意思伝達の仲介者(父には英語、母には日本語で翻訳)となり、親孝行もしたのである。

4. 伊香保の日曜学校 (Sunday School=S・S) 開設

伊香保は、温泉好きの父ロバートが家族の夏の保養地として、妻の実家の姓(武智名義)で購入した。この時代、日本の土地家屋の売買は、外国籍者に対して制限があり前例がなかったため、妻の実家名義で購入したとされている。(図6)そして、この場所を「ハワイ公使館の別館」として指定し、自分の家族だけでなく公使館に勤務する人々や、ハワイから訪日する要人のためにも開放した。

前述したように、明治30年にハワイはアメリカ合衆国と合併したので、父ロバートはハワイ公使の任を解かれて、台湾製糖株式会社の社長(明治33年)になっていた。ハワイ公使でなくなった後も、町の人たちは言い馴れた「ハワイ公使」「アルウィンさんの別荘」と呼び続けた。この「ハワイ公使館の別館」はアルウィン家から購入した講談社の研修所とされていたが、昭和50年代には群馬県社会福祉協議会が「観山荘」として保存し、現在は、群馬県伊香保町教育委員会が「旧ハワイ王国 駐日代理大使 ロバート・W・アルウィン別邸」史跡としてアルウィン家所縁の多数の遺品と共に保存し、一般公開している⁵⁾。

ベラは幼少期から伊香保の別荘で、毎年3か月(7,8,9月)程過ごしていた。ベラも父と同じ温泉好きであった。温泉以外でも、山や川、湖や森林、鳥や昆虫、小動物(リス、イタチ、野うさぎ、たぬき、きつね)などの自然が豊かで静寂な環境と町の人たちの素朴な人情など、ベラにとって伊香保は魅力満載の場所であった。ベラは伊香保に来ると、早朝や夕方、別荘付近を散策して自然を満喫し、伊香保の人々と触れ合って充実した日々を過ごした。伊香保でベラは多数の風景画や草花のスケッチをしている。(図7)



図6 家族と伊香保の別荘(ベラは右から2番目) 図7 左:樺 右:ふしぐろせんとう

こうして伊香保で一年の1/4の時間を過ごす内に、ベラは地元の幼い子どもたちと顔なじみになった。父譲りの容貌も加わり、子どもたちはベラに憧れ、跡をつけてまわるよう

になった。ベラが道端にかがみこんで草花をめでていると、子どもたちも真似して花に話かける、ベラが立ち止まって蝉の声を聴いていると、「こいつが鳴いていたんだよ」と蝉を捕まえてきて、ベラに手渡しする、といった様子であった。その内、ベラは子どもたちを別荘に連れてきておやつを与えたり、お茶を飲ませたりするようになった。子どもたちは、別荘で鬼ごっこをしたり、外国の絵本を見せてもらったりして大喜びであった。ベラは子どもたちの鼻をかませたり、泥をはらったり、喧嘩の仲裁もした。弟妹の世話をしていたので、慣れたものだった。子どもたちに、誰でも仲間に入れて平等に、親切にすることなどを教えたりした。その後、子どもたちは、三々五々に連れだって別荘に遊びに来て「ベラちゃん、あそぼう」と声をかけるようになった。

東京でのベラ的生活は、毎日父の秘書がわり、母の手伝い、妹弟の世話係と自身の勉強や習い事で多忙に過ごした。多忙な中思い出されるのは、伊香保の子どもたちの事であった。最初に出会った時から、時間が経ち子どもたちも小学生になるなど大きくなった。いつまでも子どもたちとただ遊んだり散策しているだけは物足りない、と考えるようになった。そのような思考と同時に、ベラは自身がフィラデルフィアに留学していた時の充実した日々がどこからきたものか思慮した。祖母との交流、キリスト教への信仰心など、「心を高め、魂を成長させてくれたもの、人間を愛し、人間の力の限界を知らせ、人間を創り給う大いなる存在に心づかせられたことではなかったか」と祖母の愛情がキリストの存在を教えてくれた、という事に気づき、心の目が開かれたのである。ベラは「「純粋な子どもたちに神の存在を知らせ、人生の希望と慰めを得る」という人生の指標を与えることが、自分の伊香保での務めである」と考えるに至ったのである。

ベラは早速両親に相談して了承を得て、伊香保の別荘を開放して子どものためのキリスト教伝道（日曜学校礼拝＝Sunday School 略してS・S、以降より略称で表記する）を開始した。このS・Sは、日曜だけでなく、夏休み中は幼児向けに毎日開いた。平日来られない小学生のためには、宿題や予習、復習や手仕事を教えた。また、手足を綺麗にして別荘の一室に集まり、讃美歌を歌ったり、聖書の話をしたり、お祈りしたりした。子どもたちは、聖句のカードを貰ったり、ゲームをしたり、時には湖畔にピクニックに行ったりした。そのような活動中、ベラは子どもたちに清潔、礼儀作法、他者への思いやり、ゲームのマナー等を教えた。秋には東京に戻り、クリスマスには伊香保に戻って、ページェントやコーラスなどの色々な行事を実践して楽しんだ。

毎夏、伊香保に滞在して子どもたちに触れ、キリスト教の伝道に打ち込んでいたベラの心に、ある声が聞こえてきた。同時に、幼い子どもたちが、不思議と自分に懐くことを発見した。よちよち歩いている子どもに微笑むと、手を伸ばしてベラに抱きついてくる。子どもたちがベラの言うことをよく聞いてくれること、子どもたちとベラが一心同体の様に通じあうこと、「自分の内に、子どもたちを大人しくさせたり、喜ばせる力があるのか」と自問自答した。後日、ベラは伊香保での経験を次のように語っている。

「伊香保にパパが別荘を持ったこと、それがもう、私に対しての神様の愛のご計画だっ

たのです。

伊香保の子どもたち、親切な町の人たち、美しい自然、神様の恵みでなくて何でしょう。伊香保こそ私のカナンの地でした。伊香保が私の人生の第二の誕生地なのですよ」⁶⁾と回顧している。

アメリカ留学から戻り、伊香保の地でS・Sを開き、伊香保の子どもたちと過ごしたことが、その後、ベラが「幼児教育」への道を歩む一つの大きなきっかけとなったと考えられるのである。

明治37(1904)年2月、日露戦争が勃発し、ベラは赤十字社で傷病兵の看護にあたった。その年の暮れ、フィラデルフィア在住の祖母ソフィア・アラベラ・ベイチ逝去(89歳)の訃報が届いた。祖母の悲報がベラに大打撃を与え、ベラは微熱が続き、長期間寝込んでしまった。

さらに、同時期、ベラは結婚問題で苦しみ、軽い神経衰弱状態にも陥っていた。21歳になっていたベラに、考古学者や外交官、教会員、などの縁談が持ち上がっていた。年頃のベラにとって、結婚問題は非常に大きな悩みだった。この結婚問題を契機に、今後自分自身がどの様に生きていくか、上流社会の子女として裕福な生活を送るか、日本で生きていくのか、アメリカで生活するのか、日本とアメリカの二世としてどうやって生きていくのか、思い悩んだ末、健康を損ね神経衰弱に陥ってしまったのである。ベラはこの苦悩の中で、伊香保の子どもたちと過ごしたこと、「乳幼児や子どもたちと一緒にいる時の自然な安らぎと楽しさ、幸福感、人種差別や階級差別がない人間関係」を思い出し、自分の生きていく道は「幼児と共に」と自覚したのである。

「私はもうしばらくは結婚のことは考えられません(全然考えないと言うと母が悲しむというベラの配慮で曖昧な表現にした)。伊香保の子どもたちが私の心の目をひらいてくれました。私は幼稚園の先生になって何時も子どもと一緒にいたいのです。私は一生懸命に子どものための専門の勉強をして、よい先生に、そう最良の先生になりたいのです。そして子どもに神様を知らせ、子どもを通してその親御さんたちにも、神様の存在を知らせたいのです。その勉強にどうぞもう一度、私をアメリカにやって下さい。ベラの一生のお願いです。」⁷⁾と両親に頼んだのである。母はベラに結婚を期待していたので、非常に落胆して悲しんだ。しかし、父は「女性も生涯の仕事を持ち生きることは間違っていない。自分の人生だから」と許してくれた。

ベラにとって、最愛の祖母の死と結婚問題に関連して「二世(混血)」であるということも苦悩の要因となった。また、伊香保でS・Sを開設し子どもたちと心を通わせて過ごした経験等から、「子どもの最良の友だちになりたい」と覚悟を決め、子どもの心理や生理を学び「幼児教育への道」へ邁進していく、大きなきっかけ・動機となったと考えられるのである。

5. 幼児教育への道（プロフェッショナルをめざして）

(1) フィラデルフィアの幼児教育学校へ（2度目の留学）

明治39（1906）年11月、ベラは横浜港より日本郵船天洋丸でアメリカに向け再留学した。一回目の留学の時とは違い、船室で毎日張りつめた気持ちで、ひたすら祈り、考えて過ごした。この時、ベラは二世であるコンプレックスと結婚を永久に断念した辛い思い、「幼児の友」として自分の生涯を生きる、事を考えていた。「言い表すことのできない両生類的なコンプレックスが私の心にあります。私は日本にいても純粋な日本人でいられないし、アメリカにいてもやはり、純粋なアメリカ人ではいられなかったのですよ。どちらにも属さない不安定な感じと戦うのに、時々私はつかれ果てました。私の祈りはそんな時に、果てしない、ぐちと嘆きのくり返しなのでしたよ。キリストを知らなかったらたぶん私は自殺したかも知れません」⁸⁾と後日、ベラはこの頃の心境を告白している。

長い船旅後、フィラデルフィア市の叔母ソフィアの家に入り着き、ベラが幼児教育に着眼した事を話すと、叔母たちは高く評価して助言し、その道の教育者たちに紹介してくれた。叔母ソフィアの紹介により、ベラは大学課程の個人教授を受ける資格を取得した。

明治41（1908）年9月、フィラデルフィア市のドルクス化学栄養学校（Dulx's Chemical Dietetic Institute）で、幼児の栄養、一般化学、組織学、家政学等を学び、明治42（1909）年6月に卒業した。

明治42（1909）年9月より、フィラデルフィア市のカロライン・ハート（Caroline M.C.Hart）女子の経営する幼児教育専門学校（Miss Hart's Training School for Kindergartners in the City of Philadelphia）に入学し、「フレーベルの教育学」と出会った。この学校では3年間で、心理学、教育学、歴史学、博物学、聖書学、衛生学、童話学、音楽、体育、工作、各種実習（幼稚園・保育所）、セツルメントなどを学習した。この学校に在学中、ベラは童話研究に特別興味を持ち、アンデルセン、イプセンの「ペールギュント」、ストリントベリーの童話劇「白鳥姫」、セルマ・ラーゲルレーフの「幻の馬車」、日本や中国の昔話なども研究した。

幼稚園実習では、「センター・セツルメント」のスラム街でイタリア、メキシコ、スペイン、プエルトリコ、黒人、東洋人等が道路に溢れている場所で、毎日、看護師と栄養士、保育士を三者兼ね備えたような経験をする厳しい実習であった。しかし、ベラにとって実習が過酷なほど、エネルギーがみなぎり、自身の頑張りの原動力となっていたのである。

(2) マリア・モンテッソーリとの出会い

カロライン・ハートの幼児教育専門学校在学中の明治43（1910）年、イタリアのローマで「世界日曜学校大会」が催され、ベラも全米S・S関係者協働団体に加入し、夏期休暇を利用して友人と参加した。この時の参加者に、マリア・モンテッソーリ（伊: Maria Montessori 1870-1952）や「ペスタロッチ・フレーベル学園」の教師たち、救世軍の父と

呼ばれた山室軍平などが参加していた。大会では、老若男女、人種を越えて神の前にぬかずいて、伝道の使命と献身を誓い、S・Sのあり方を思想・技術の両面から学び、先輩たちから教示された内容に、ベラは大変感銘を受けた。その中でも、ベラはモンテッソーリに出会って、深く傾倒したのである。

モンテッソーリが医学実習中に会った知的障害児の現状を知り、「教育的治療学」を研究し、感覚発達教具を考案していること、病児のみを対象とせず一般児童の教育にも心を向けている、ということを知り、ベラは熱心にモンテッソーリの話聞いた。ベラの真剣な態度がモンテッソーリの心を動かし、モンテッソーリから「機会があれば自分のもとにきて一緒に勉強しよう」と誘われたのである。このモンテッソーリとの出会いが、今後のベラの幼児教育への道を歩む大きな原動力となった。大正2(1913)年、ベラ(30歳)がモンテッソーリと初めて出会ってから3年後、ローマのモンテッソーリから「感覚教育のための国際コース開講(1914年～)」の通知が届いた。ベラは早速、入所手続きを取った。

この講座に参加する前に、ドイツのマリエントールにある「フレーベル学園」で3カ月間は聴講生として、『人の教育(独:Die Menschenerziehung, 英:Education of Man)』、『母と子の遊戯(独:Mutter-und Koselieder, 英:Mother's Play)』について、研究グループで熱心なディスカッションを実施し、レポートや感想文、実習記録作成に明け暮れた。また「恩物(独:Gabe, 英:Gift)」については、ドイツ人の子どもたちを相手に実習し、楽しくも充実した学習経験ができた。その後、ドイツからスイスを横断してイタリアのローマに到着し、大正3(1914)年2月より6月末の4か月間、待望のモンテッソーリ教育(国際コース)を学んだ。モンテッソーリは46歳、ベラは32歳であった。

ベラは、モンテッソーリの感覚教育の理論が知的障害児に向けた「愛」から出発し、「精神と感覚の相互統一と相互発達が、教育の根底である」と学んだ。同時に、モンテッソーリは障害児や一部の病児のみならず、定常発達(健常児)している子どもたちの教育にも心を向けていることに、ベラは大変共感した。「感覚」とは、身体各部の感覚器官だけでなく、人間の内部に外界の感覚刺激から引き起こされる活動機能(叡智の能力)に、善悪を区別する感知力が存在する。これらを、社会生活指導や感覚訓練教具を通して発達させること、①教具を使用した「新感覚教育の理論」の実習、②幼児の生活指導実習、③人間の生理研究、④担当児の家庭環境と遺伝学的調査、⑤実習から得た各種の統計表・調査表、統計作成上の技術訓練、⑥自由主義に基づいた個性開発研究等々、モンテッソーリの新感覚教育を叩き込まれた。講義と実習と統計作成に明け暮れたが、充実した4か月間の学びであった。ベラの熱心な学習態度に、モンテッソーリは特別な関心を持ち激励してくれた。そして、ベラは全ての講習を修了して卒業証書を取得し、イタリア、スイス、フランス、イギリス各地の幼児教育を視察し、最後にボストンで開催された「アメリカン新教育研究会」に出席し、マダム・サトン(ベラの従姉)に会い「一生独身で幼児教育に生きる」という決心を打ち明けて帰国した。同時期、第一次世界大戦が勃発したのである。

この4か月間、モンテッソーリから直接教示を受けたことが、後にベラが幼児教育への

道を邁進して幼稚園を創設するにあたり、また幼児教育を実施する上で多大な原動力となったと考えられる。

(3) ヘレン・パークストとの出会い

カロライン・ハートの幼児教育専門学校に在学中に、ローマの「世界日曜学校大会」から戻り新学期が始まると、ベラはコロンビア大学の「フレーベル研究講座」に1か月間聴講生として学んだ。明治44(1911)年、ベラが28歳の時であった。(図8)

コロンビア大学の「フレーベル研究グループ」では、フレーベル考案の「恩物(独:Gabe, 英:Gift. 日本語の恩物は関信三の訳による)」の持つ科学的、数理的な面を深く研究し、実際に幼児にどのように恩物を使用して遊ぶかなどの実践研究を発表した。ベラは、数学が得意であった面も生かしつつ、フレーベルの教育思想を理解した上で、子どもの発達段階に合致した実践研究を発表し、教授や友人たちからも賞賛を受けた。

この時に、ドルトン・プラン(the Dalton plan)の創案者であるヘレン・パークスト(米:Helen Parkhurst 1887-1973)と出会い、起居を共にして非常に親しくなり、二人の友情は長く続いた。

さらに、ベラがイタリアのモンテッソーリ国際コースを受講している期間に、パークストがローマに来訪し、ベラと旧交を温めた。そして、ベラの紹介でパークストはモンテッソーリと交流し、ローマ滞在中は毎日のように会って、新教育の理論について互いに啓発し合った。後に、ベラはこの時のことを「一つの信念と人生目標を持ち、その仕事に専念している人間は、その人全体が輝くように美しく見えるものです。ヘレンとモンテッソーリ先生が楽しそうにお話ししている姿を見ていて、何ともお二人とも美しく、和気あいあいに見えたでしょう。私は羨ましくてたまりませんでした。忘れることのできない思い出です」⁹⁾と繰り返し述懐している。



図8 コロンビア大学 Gift サークル(左端 ベラ)

パークストはその後来日し、ベラと再会しているのである。パークストとの出会いも、ベラが幼児教育の道へ邁進し教育者として幼稚園を創設するにあたり、影響力があったことと推察されるのである。

(4) 伊香保の日曜学校事件

ベラがアメリカやイタリアに5年間留学して学習している間、自宅も三田綱町→北品川→麴町（千坪近い敷地をジョサイア・コンドル[英: Josiah Conder 1852-1920]が改築）と転居していた。ベラが留学から戻って住んだのは、麴町の住居であった。ちなみに、ジョサイア・コンドルは鹿鳴館や岩崎弥之助邸、ニコライ堂等を建築した著名な建築家である。

ベラが留守の間、伊香保の日曜学校S・Sは母いきが責任者として運営し、伊香保の生徒や保護者たちが協力していた。伊香保のS・Sは幼児が30人以上、児童20名以上、大人が30名以上と大所帯になっていた。ベラが留学中に起きた事件は伊香保町誌に掲載されている。

日曜学校事件とは、明治45(1912)年11月、朝礼の際に校長から「1.日曜学校に父兄が出席せよと言わぬ限り、なるべく出席しないこと、2.出席を禁止せざれど、父兄の勧むることなくば、学校にては出席を望まぬこと(原文通り)」¹⁰⁾と小中学校の生徒に向けて「日曜学校に出席するな」という実質的な禁止が言い渡されたのである。「もしも、日曜学校に出席したら(成績の)点数を減点する」とまで通達したのである。この日曜学校事件問題は長引き、留学中のベラの元にもいろいろな人から手紙等の訴えがあった。

(2)のモンテッソーリとの出会いで記したように、ローマの「世界日曜学校大会」に出席したベラは、伊香保の場所柄と自分を慕ってくれる子どもたちを念頭に置き、当初、伊香保で幼稚園創設と幼児教育の中心となるような教育センター設立(セツルメント、農繁期の乳幼児委託施設)をしたいという夢を抱いていた。しかし、日曜学校事件が起り、伊香保での幼稚園設立を考えると、根深い問題や理由があることが分かった。その理由を幾つか挙げると「①キリスト教では酒も煙草も禁止する、伊香保では慰安を求められる湯治場だから禁止したらさびれてしまう。②キリスト教では、人類は平等であるというが、そんなことはない、金持ち、貧乏人、健康、障害者がいる。本当に平等ならこんなことはないはずだ。③日曜学校の生徒は生意気である」等々、であった。ベラは自分の祖国ながら、日本の国柄や考え方に驚き、同時に封建性や日本の官吏、地方の官憲の強さについても学んだのである。何とかして問題解決して伊香保に幼稚園設立をしたいと思い悩んだが、強引に実施しようとするれば、伊香保の子どもたちが犠牲になる(S・Sに出席すれば減点されるなど)。しかし、自分が信じるキリスト教の教えを實踐できる幼稚園を創立するのでなければ意味がないし、子どもたちが犠牲になる子とはしたくない等、様々な思いを巡らし悩んだ。伊香保の日曜学校事件は、ベラにとっては大打撃となり、暫く虚脱状態が続いた。明治45(1912)年、明治天皇が崩御し、新しい大正時代が幕開けした。

6. 学園と幼稚園創設に向けて (「Best」こそ、わが目標)

伊香保の日曜学校事件はベラにとり大きな痛手となったが、麴町での日常生活を淡々と過ごす内に、幼児教育のプロフェッショナルをめざしてアメリカやイタリアで一生懸命学んだことを思い出し、「良い幼児教育者に、第一級の幼児教育者になりたい」という願望がベラを勇気づけた。

「一つの挫折で終わらない」「伊香保だけに子どもが住んでいるわけではない」「伊香保の父の別荘をあてにした、また伊香保の人々の好意に甘えていた自分を反省し、自分自身の力でふさわしい場所で働くべきだ」など考えて、ベラは立ち直ったのである。

それから、日本の幼児教育の現状を知ろうと資料や情報を集め、幼稚園の見学を始めた。キリスト教関連の幼稚園、お茶の水幼稚園、学習院幼稚園、竹早幼稚園、番町小学校附属幼稚園、霊南坂幼稚園、雙葉幼稚園、仏教系関係の幼稚園、モンテッソーリの影響から特殊養護施設盲学校、聾啞学校、孤児院、母子ホーム、託児所、養老院等々、見学し、各施設の特色・内容・制度等を比較した。また、日本における幼児教育の理想を考える為に、教育現場の教育者たちと知り合い、アメリカと日本の社会構造や教育制度の違いなどを知り、研究を重ねた。この時、知り合った教育者には、倉橋惣三（お茶の水）、宇佐美稔（学習院）、林愛子（竹早）、野口幽香（雙葉）など、である。

アメリカと日本の幼児教育の比較をした時に、ベラは次の相違点について以下の様に痛感した。

- ① 幼稚園と保育所の数の相違…日本は比較できないほど少ない、教育開始時期の考え方の相違
- ② 幼児教育者の養成機関不足…幼児教育の重要性の認識が低い、啓蒙の必要性あり
- ③ 幼稚園設置の地域差・設備差…教育内容の形式化、幼児理解と環境整備の重要性
- ④ 宗教は強制で教えるのではなく、知らせること。信念を持たない人の手でマンネリ化の横行

国内の幼児教育施設を視察した結果、自分には幼児教育者としての学びが不十分と感じ、パークストやモンテッソーリと出会ったアメリカ、イタリアへの留学をして見識を深めたのである。

ベラが留学し勉学に勤しんでいた明治期のキリスト教主義幼稚園の設立は、『日本キリスト教保育百年史』によれば、以下のように分類されている¹¹⁾。

- ① 女学校を母体として設立したもの
- ② 宣教を目的として教会の業として設立したもの
- ③ 信者が個人で設立したもの
- ④ 貧困な家庭の子ども福祉と教育をめざして設立したもの
- ⑤ 幼児教育の専門家として婦人宣教師が保母養成と共に設立したもの
- ⑥ その他

ベラの場合は、上記③に該当すると思われる。⑤のような幼児教育の専門家であったが、宣教師としてではなく、キリスト教を伝道したいという思いはあったが、あくまでも一個人として幼稚園と保育者養成校を設立しようと努力したと考えられる。

大正3(1914)年、ベラは留学から戻るとすぐに両親に「幼稚園と、保育者養成機関を創設したい」と希望を打ち明けた。両親は後方支援をすると応援してくれたものの、資金も構想計画も自らの力で切り開かなければならなかった。再留学時も、弟妹がそれぞれに留学して家計が大変な事を知っていたベラは、自分の衣服、装身具類は最低限の質素な物で済ませる習慣を身に着けていた。幼稚園創設に至っては、父からもらう小遣いを大事に貯めて、自宅近くに手頃な物件を見つけた。

幼稚園創立には、知己や友人の紹介により同じような生活環境の子どもたちを集め、保育者養成所の生徒たちも同様であった。この幼稚園と保育者養成所設立には、国内の幼稚園を視察して回った時の友人たちが協力してくれた。倉橋惣三もベラの理解者の一人で、お茶の水女子保育専修科にベラを招き生徒たちのために講座を開いた。また、頌栄幼稚園のA.L.ハウはベラの大先輩として、同じくフレーベルを学ぶ同士として、適切な助言や忠告をしてくれたのである。

幼稚園教育、保育者養成校設立に関して「何を最良とするか」ということに対して、肩書や地位、権力者、人種とかの外面的なものではない、「Bestこそがわが目標、Betterに非ず」「最良の教育は最良の教師によって実現し得る」という信念のもと、まず、学校の教師を探し始めたのである。

(1) 最良の教師をもとめて

「最良の教育は最良の教師によって実現し得る」という信念のもと、ベラが最初に着手したのは、「最良の教師」探しであった。教師を探すために行ったのは、教会関係者や園視察や研修会で知己になった教師たちからも情報を得た。何人か候補者があがると、その教師の授業を参観したり、講義を聴講し、著書を読んだりした。自分が納得すると母を伴って(特に男性教師の場合のマナーとして)、教師の自宅を家庭訪問し、礼をつくし承諾を得るまで決して諦めず懇願したのである。この様な教師宅の家庭訪問は何十年も続いた。そして、最初に養成校に赴任した教師は以下の方々である。

心理学：文博松本亦太郎（東京帝国大学教授）
 児童心理学：文博田中寛一（東京高等師範学校教授）
 教育学及び教育史：文博植崎浅太郎（東京高等師範学校教授）
 音楽：渡辺トリ（上野音楽学校教授）
 博物学（動物・植物）：平島権蔵（東京女子師範学校助教授）
 彫塑・陶芸：吉田三郎（帝国美術委員）
 保育衛生学：医博宇都野研（宇都野病院長）
 体育：メリ・エイチ・マクロイ（米国オーバリン大学）
 絵画及び美術史：赤津隆助（青山師範教諭） など ※教師の一部を掲載した

「最良の教育には最良の教師」の信念のもと、数年もの時間をかけて最良の教師陣を探し準備が整うと、自宅近くの麴町区土手三番町（現在の市ヶ谷駅から2分くらいの場所）に狭いながらも一軒の民家を借り受けた。そして、幼稚園と保育者養成所の創設準備に取り掛かった。

上記したように、「Bestこそわが目標、Betterに非ず」「最良の教育は最良の教師によって実現し得る」というベラの信念・教育思想のもと、教師探しも人任せにせず自身が納得するまで何度も候補者の講義を聴講し、家庭訪問するなどして最良の教師を選定し依頼したのである。このベラ的情熱が、自身の思想を具現化する努力と共に、幼稚園を始めとした学園創設に至った経緯であると、信念と忍耐強さに感銘を受けるのである。

(2) 「^{ぎよくせい}玉成」と名付けて

まず最初に、創設した幼稚園と養成所に名称をつけなければならない。名称については、ベラの中に構想があった。ドイツのマリエンタール「フレーベル学園」で学んでいた時、ある日の授業ディスカッションで、フレーベルの「英: Gift (独: Gabe, 日: 恩物 次より「恩物」と表記する)」の最初に考案された「球」について、各民族による呼び方を研究した経験がよみがえった。

ギリシャ語: Sphaira、英語: (Sphete・Globe・Ball)、独語: (Sphäre・Glöbus・Ball)、 仏語: Sphère・Globe・Balle)、イタリア語: Sfera・Globo・Palla) など…

その時、ベラは日本語で「球」は何と呼ぶかと、いろいろ考えた。「球(ボール)、毬、玉(火の玉、毛糸の玉)、珠(真珠のようなもの)」などである。日本では一種の褒め言葉や美しいもの、尊い物を、「玉のような男児」「玉のような声」「玉座」など、と「玉」を付けて表現することを改めて知った。

また、「磨かざば玉もこがねも」という比喩歌があり、研磨することで玉は完全になるという意味に、ベラはいたく共感した。この東洋的な思想と宇宙の完全形態の基礎となる「球」の共通項を見出し、「幼稚園児もまた保育養成者も共に人格形成をして美しく、めでたく尊いものになるという願いをこめて」「玉となる理想」¹²⁾ から「玉成」と名付けたのである。このことから、学園名の命名に至る経緯にも、数回の留学経験やベラの研究心・学習意欲が、反映されている事が理解できるのである。

(3) 玉成幼稚園と玉成保姆養成所創立

大正5(1916)年、2月に学校の認可がおり、4月より市ヶ谷駅(麴町土手三番町)近くの閑静な住宅街の一般住宅を校舎として、幼稚園と保育者養成校の開園・開校が決まった。園児と生徒の募集に関しては、伊香保の打撃(S・S事件)がトラウマになっていたため、必ず信頼のおける紹介者を介してのみの募集とした。創立当初の幼稚園園長兼養成所所長は、もちろんベラであった。

「玉成幼稚園」創立当初の園児は 15 名で、「玉成保姆養成所」の学生は 11 名であった。昭和 2 (1928) 年に校舎を高井戸に新築するまでの 12 年間、園児の兄弟姉妹や知人の入園希望があっても、幼稚園はずっと 15 名の定員を守り続けたのである。この学園創設について、『キリスト教保育 125 年』では、「玉成保姆養成所開設 (初のモンテッソーリ教具使用)」¹³⁾ という表記が見られるのである。

アメリカとヨーロッパ留学の帰国途上で、ベラは将来の幼児教育のためにモンテッソーリ感覚教具をニューヨークの“The House of Childhood 社”に依頼し、一式を購入した。また、フレーベルの恩物は帰国後、頌栄幼稚園の A.L. ハウの紹介で大阪葵倫社に 30 人分を注文し購入した。この恩物はドイツの「フレーベル学園」の複製なので、全部インチの単位であった。この頃、日本では長さ、高さ、容積などは全て尺貫法を使用していたので、ベラは幼児が混乱をしないようにと考え、恩物の単位を全てメートルに切り替え、フレーベル館に製作を依頼したのである。

玉成幼稚園でのベラと子どもたちは、とても親密で仲が良かった。ある卒園生は「自分たちは、ベラさんが外国人であるなどという印象は一度もうけなかった。アルウィンちゃんと呼んで自分たちの仲間、ただ面白いお話しをしてくれて、いろいろとゆかいな遊び方を考え出して遊んでくれる人と思っていた」¹⁴⁾ と語っている。(図 9, 図 10)



図 9 玉成幼稚園の園児とベラ
(右から 2 人目)



図 10 園庭の園児たち

さらに、幼稚園の第 2 回卒園児である山本達郎 (東洋史学者、東京大学名誉教授、「平成」の名付け親)¹⁵⁾ が、玉成幼稚園創立 50 年記念祝会の席上で、次のように述懐している。

「私はアルウィン先生のお隣に住んでおりましたから、幼稚園の往復はご一緒でございました。その間に先生に何か話してちょうだいと、いつも言うんです。幼稚園児ですから、ずいぶん歩くのが遅くてお困りだったろうと思います。二十分位かかる処で、その間を年中話しなければならないという、先生には大へんご負担だったと思うんですけど、よくお話しをして下さいました。歩きながら、お伽話をして下さいそのお話しというのが、その有名な何とかというのか何とも言えないお話しでございまして、その次の時に、この前のあのお話をと言うと、もう忘れていらっやって何かわからない。しかし、とにかく次々にお話が出てくるのです。そのお話でいかに大きなものを与えられたかということ、あとに

なって気が付きました。と申しますのは、私は大学を卒業して、大学の教授になって、いろんな教育みたいなことに、ずっと関係して、今までおりますわけでございますけれども、アルウイン先生ほどの教育者には出会ったことがないのです。(中略)教わったのは、アルウイン先生のお話の時だの、花だの、虫だのをつかまえながら話された時などのその時の感じなんです。その時の感じと、現在の世界平和に関する考え方の場合に物を考える考え方とが同じなのです。(原文のまま)¹⁶⁾と語っている。

山本は、幼稚園への往復をベラと毎日一緒にして、さまざまな話を聞いた幼児期の体験から、ベラ思想である「良い物を見ていけば悪い物はひとりでにわかる(本物を見ていけば、偽物はわかる)」「一つの花を見た場合に、神様から授かった」「美しい物を見て、汚い物は見ない」という物の見方や考え方を教わったとしているのである。このように、ベラと密に幼児期を過ごした園児が大人になって学者になった、ということをベラが知ったら大変喜んだと思えるのである。

内田が『幼児心理学への招待』の中で、「集団保育の場に参加するような年齢になれば、保育者、友だちとも関わるようになる。このような身近な人々との相互作用を通じて人間に特有な学習が成立する。身近な人々は、彼らが生きる文化の価値の体现者である。」¹⁷⁾と述べているが、まさに、園児だった山本には、ベラと共に過ごした幼稚園や通園途中での関わりは、物の考え方や価値観を構築する上で、文化価値の体现者であったと考えられるのである。保育者の言動や価値観が、子どもたちの心身に影響を及ぼすと考えると、保育者としての責任は非常に重要であると、改めて身の引き締まる思いがするのである。

そして、幼稚園と同時期に設立された「玉成保姆養成所」は、11名の学生を受け入れた。一般住宅を校舎として、玄関2畳、教室は8畳間に大きな黒板を据え、続きの6畳間に午前中に幼稚園で使用した机に脚を継ぎ足して並べた。(図11, 図12)廊下伝いにあった離れの座敷は、図書室兼オルガン練習室であった。

養成所に入学するには、幼稚園同様に知人の紹介が必要で、その上、ベラの面接に合格した者だけが入学を許可された。生徒数は年度により多少の差があったが7名～15名と



図11 玉成幼稚園と玉成保姆養成所



図12 机(園児用と継ぎ足しの脚)

少人数で、一人ひとりの才能を引き出す、という教育方針だったので、一人ひとりの生徒にまめやかに目が行き届く教育であった。

イタリア留学から戻り熱意のこもったベラの講義に、学生たちは一生懸命学んだ。ベラは、[フレーベルの恩物と手技、母と子の遊戯、会集、細目 (カリキュラム)、モンテッソーリ感覚教育]を教示した。他教科は、前掲 (最良の教師をもとめて) した通りである。

二学期は毎日、午前中は実習で全てが筆記の授業でありベラの講義中は1本の線を引くのも厳しく、学生は筆記だけでも大変で睡眠時間を充分とることもできないほどであった。

厳しかったのは、勉強だけでなく、躰の面では徹底した指導が実施された。例えば、お辞儀の仕方や歩き方に始まり、お茶の出し方、部屋の出入り、掃除でははたきのかけ方まで指導した。この時、生徒たちは初めて正しい掃除の方法を知ったのである。躰や掃除等の基本的な生活習慣全般に対する指導を実践していたのは、アメリカ留学中のマダム・サトン女子寄宿学校の教育方針が生かされているように思えるのである。またこのことは、現代の保育現場でよくいわれる「環境整備」の重要性を日々の学生生活で経験を通して学んでいたと言えるであろう。このように、授業や躰などには厳しく指導した反面、ベラは温かい家庭的な思いやりにも満ちていた。四季折々に触れ、学生を色々な場所に連れて行き、夏休みには伊香保の別荘に生徒を連れて行ったり、寒い日には大鍋で煮込みうどんをふるまったりした。

第一次世界大戦に戦勝して賑やかな頃、世情を反映して、子どもの歌や遊びへの戦争の影響をベラは懸念した。そこで、保育の中で、鉄砲や戦争に関連したものは遊びには絶対使用しなかった。

そのベラの意向は、戦争後の平和な時代が訪れても、幼稚園や養成所に「創設者の思い」として現在も引き継がれ保育実践がなされている。(図13, 図14)



図13 第一回卒業生と (ベラは後方真ん中)



図14 ベラと園児 (園庭にて)

7. まとめと今後の課題

ソフィア・アラベラ・アルウイン (Sophia.Arabella.Irwin) は、ベンジャミン・フランクリンの末裔であるアメリカ人の父と日本人の母の長女として誕生した。父がハワイ公使であったこともあり、裕福な家庭に生まれ育ったが、生い立ちの日系二世故のいじめや苦悩も経験した。ベラが幼児教育者として、幼稚園と保姆養成所を創立するにあたり、そのきっかけ・動機となった経緯は次の3項目があげられると思われる。

1つ目は伊香保の別荘での子どもたちとの出会いである。幼少期より自然豊かな伊香保の別荘で、純朴な子どもたちの友人として楽しく遊んで交流した経験から「子どもたちと共にいる幸せ、子どもたちに上手に関われる」と自己発見したことが幼児教育者を目指し、幼稚園設立をした大きな動機となっている。日曜学校 (S・S) を創設し、さらに、子どもたちや伊香保の人々から慕われ、親密に過ごした経験が幼児教育の道に歩む重要なきっかけとなったと考えられる。ベラは後年「伊香保にパパが別荘を持ったこと、それがもう、私に対しての神様の愛のご計画だったのです。(中略) 伊香保こそ、私のカナンの地でした。伊香保が私の人生の第二の誕生地なのですよ」⁶⁾ と追憶して語っていることから、推察されるのである。

2つ目はベラ自身の結婚問題と祖母 (父方) の影響 (キリスト教の信仰心) が関連していると思われる。雙葉学園小学校を卒業後、父の実家であるアメリカのフィラデルフィアで祖母と過ごした日々の中で、祖母から「神の前に人は皆平等である」というキリスト教の信仰心とフランクリンの末裔であるという誇り、深い愛情を受けて育った。祖母の深い愛情と信仰心により、ベラは二世であるという劣等感を乗り越えられたのである。祖母の信仰心がベラの心に信仰心を育み、キリスト教主義の幼稚園と養成所を創立する教育思想のバックボーンとなったと考えられる。しかし、結婚問題に関しては、二世であるが故の苦悩があり、結婚せず生涯、幼児教育の道に進むきっかけとなったのである。日本人を始めアメリカ人との結婚話も多数あったが、「私はもうしばらくは結婚のことは考えられません。伊香保の子どもたちが私の目をひらいてくれました。私は幼稚園の先生になって何時も子どもと一緒にいたいのです。」¹⁸⁾ と両親に頼んで二度目のアメリカ留学をしたことから理解できるのである。

最後に、「フレーベル学園」を始めとした多数の留学・学習経験と尊敬できる教育者との出会いが、ベラの幼児教育思想を形成し学園創立への原動力となったと考えられる。先述したように、2度のアメリカ留学とドイツの「フレーベル学園」、イタリアの「モンテッソーリ国際コース」などに留学し幼児教育のプロフェッショナルとして見識を深めた。また、留学中に様々な体験をしたこと、マリア・モンテッソーリやヘレン・パーカストなどの教育者との出会い多大な感化を受けたこと、日本国内でも視察を重ね倉橋惣三を始めたとした A.L. ハウなどの教育者との出会いにも影響を受け、幼稚園と学園創設の原動力となったと考えられるのである。

この3点の動機のもと、幼児教育者として、幼稚園と保育者養成校を設立した。ベラの教育思想は、キリスト教の篤い信仰に基づき、「Bestこそがわが目標、Betterに非ず」「最良の教育は最良の教師によって実現し得る」という信念を礎に、園児、生徒一人ひとりに愛情を注ぎ、各々の良さを引き出す、という教育思想であった。

本論文では、ベラの玉成幼稚園と玉成保姆養成所創設に至った動機と教育思想を中心に概観した。しかし、本論文ではベラの幼児教育思想が玉成幼稚園や保姆養成所で、どのように具現化され、保育実践されていたのかまでは研究することができなかった。そこで、今後の課題として、ベラの教育思想が保育内容や保育方法にどのように反映し具体的に実践されていたのか、時代背景と共に概観し、研究したいと考えている。さらに、養成所で生徒指導や教育内容についても学び、学園の推移などを始めとした保育内容の変化、創設者の思想がいかに受け継がれ、また、変遷したかなどについても、継続して研究したいと思う。



図 15 創設者アルウィン・ベラ (壮年期)

引用文献

- 1) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社 1979 pp171～172
- 2) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウィン学園 1980 pp21～47
- 3) 同上 pp29～30
- 4) 同上 p60
- 5) 伊香保町教育委員会「旧ハワイ王国駐日代理公使 ロバート・W・アルウィン別邸」パンフレット
- 6) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウィン学園 1980 p96
- 7) 同上 p102
- 8) 同上 p108
- 9) 同上 p132
- 10) 同上 p119

- 11) キリスト教保育連盟『日本キリスト教保育百年史』1986 pp74～78
- 12) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウイン学園 1980 p151
- 13) キリスト教保育連盟『キリスト教保育 125 年』キリスト教保育連盟 2014 p133
- 14) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウイン学園 1980 p155
- 15) 20 世紀日本人名事典
- 16) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウイン学園 1980 p156～159
- 17) 内田伸子『幼児心理学への招待 [改訂版] 子どもの世界づくり』サイエンス社 2008 p16～17
- 18) 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウイン学園 1980 p102

図 (写真)

- 1～5: 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウイン学園 1980
- 6: 伊香保町教育委員会「旧ハワイ王国駐日代理公使 ロバート・W・アルウイン別邸」pf
- 7: 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウイン学園 1980 p115
- 8: 同上 巻頭
- 9～10: 玉成 70 年記念委員会『玉成』盛光印刷所 1985 p9
- 11～14: 同上 pp8～9
- 15: 同上 巻頭

参考文献

1. 小林郊人『後藤三右衛門』信濃郷土出版社 1935
2. 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに株式会社 1979
3. 日本保育学会編『日本の幼児教育 Early Childhood Education and Care in Japan』チャイルド社 1979
4. 松村康平『荒野に水は湧きて』学校法人 アルウイン学園 1980
5. 岡田正章編『フリードリッヒフレーベル いま、私たちが学ぶもの』フレーベル館 1982
6. 玉成 70 年記念委員会『玉成』盛光印刷所 1985
7. キリスト教保育連盟『日本キリスト教保育百年史』1986
8. 豊山大和著『女子学生のための教育学入門』学文社 1995
9. 80 周年記念委員会『アルウイン学園 80 周年記念誌』いづみプリンティング 1995
10. 小原芳明『ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部 1996
11. 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房 2001
12. フリードリッヒ・フレーベル著 A.L. ハウ訳『母の歌・遊戯と育児の歌』頌栄短期

大学 2002

13. 松浦公紀著『モンテッソーリ教育が見守る子どもの学び』学習研究社 2004
14. 永野芳宣『物語ジョサイア・コンドル 丸の内赤レンガ街をつくった男』中央公論社 2006
15. 永井理恵子『近代日本キリスト教主義幼稚園の保育と園舎―道愛幼稚園における幼児教育の展開―』学文社 2011
16. キリスト教保育連盟『キリスト教保育 125 年』キリスト教保育連盟 2014
17. 清原みさ子『手技の歴史 フレーベルの「恩物」と「作業」の受容とその後の理論的、実践的展開』新読書者 2014

